

第 3 回講義 (20120518)

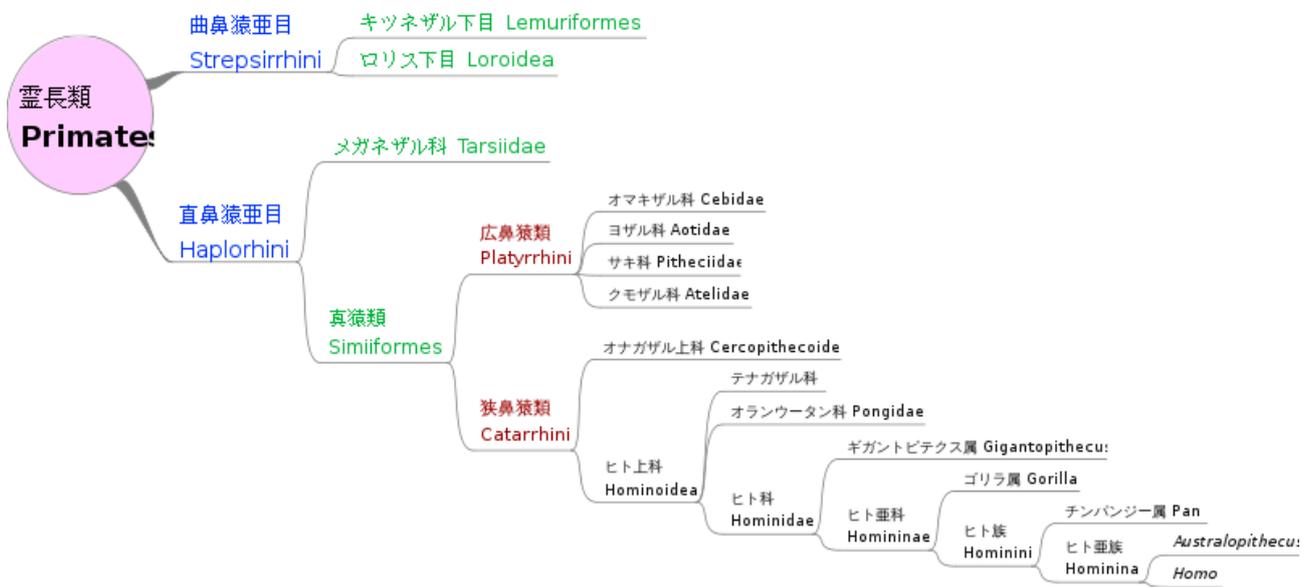
§ 3 言語の起源について

もしすべての言明が問いの答えであり、問いの答えが、同一性言明であるとする、言語の起源を説明することはとりもなおさず、問いの起源と同一性言明の起源を説明することになる。

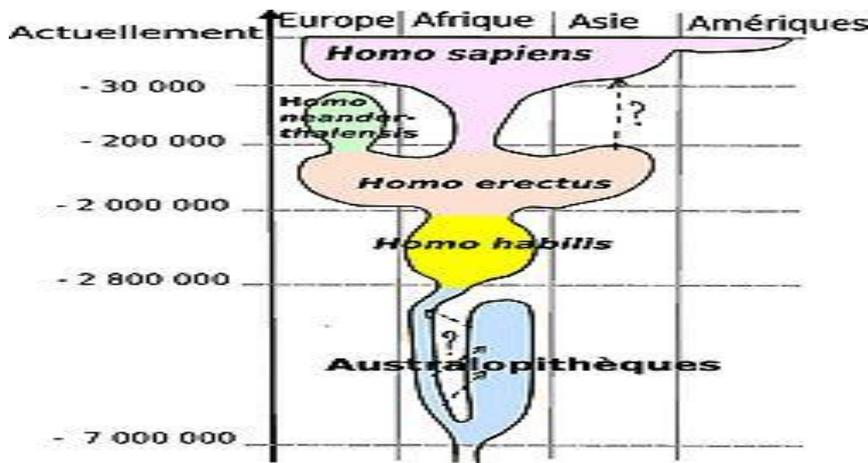
言語の起源を経験的に調べることは、非常に難しい。(タイムマシンができれば別だが) 私たちには、人類が言語を持ち始めたのがいつであるかすら知ることが難しい。文字は物として残るので、その起源を調べることができる。しかし、文字が成立する以前の言語の起源を確定することは難しい。言語がなければ、存在しえないようなものが存在しているならば、それが言語があったことの証拠になるだろう。

1 生物学での人類の位置づけ。

生物学によれば、脊椎動物亜門の中に 哺乳綱があり、その中に霊長目(Primates=霊長類=サル類)がある。霊長目のなかに、キツネザル類、オナガザル類、類人猿、ヒトなどがふくまれる。(下図は、Wikipedia「霊長類」からの引用です。)



霊長目一直鼻猿—真猿類—狭鼻猿類—ヒト上科(Hominoidea)と分かれ、  
 ヒト上科(Hominoidea)が、テナガザル科とオランウータン科とヒト科(Hominidae)に分かれ、  
 ヒト科(Homindae)が、ギガントピテクス属とヒト亜科(Homininae)に分かれ、  
 ヒト亜科(Homininae)が、チンパンジーとヒト亜族(Hominina)に分かれ、  
 ヒト亜族(Hominina)が、Australopithecus と Homo に分かれる。



類人猿(ape)とは、ヒト上科に属する種のことであり、その中で、小型類人猿が、テナガザル科、大型類人猿が、ヒト科に属する種(オランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ヒト)のことだそうです。

ヒト亜族(australopithecus)が登場するのが、700万年前、  
 そこから homo habilis が分化するのが、280 万年前、  
 それが homo erectus になるのが、200 万年前  
 これから旧人とされる homo neanderthalensis や 新人とされる homo sapiens が現れる。  
 homo neanderthalensis が現れるのは 25 万年前であり、3 万年前に滅んだ。  
 現生人類である homo sapiens があらわれるのが、25万年前である。  
 homo sapiens はアフリカで生まれ、7 万年から5万年前にヨーロッパとアジアに広がった。

アフリカにヒト亜族(Australopithecus)が登場するのが、700万年前、そこからHomo habilisが分化するのが、280万年前、それがHomo erectusになるのが200万年前(これらが原人とよばれる)、これから旧人と呼ばれるHomo neanderthalensisが現れるのは25万年前であり、彼らは3万年前に滅んだとされる。新人と呼ばれる現生人類、Homo sapiensがあらわれるのが、25万年前である。彼らは、7万年から5万年前にアフリカを出て、ヨーロッパとアジアに広がったとされる。

## 2、考古学的な人類の歴史

Australopithecusは石器を作らなかったが、石やこん棒を道具として使っていたと思われる。  
 Homo habilisが石器の使用をはじめが、それは260万年前にはじまるとされる。

火の使用:12万5千年前

「ヒト属による単発的な火の使用の開始は、170万年から20万前までの広い範囲で説が唱えられている。最初期は、火を起こすことができず、野火などを利用していただけのもっと見られるが、日常的に広範囲にわたって使われるようになったことを示す証拠が、約12万5千年前の遺跡から見つかった。「40万年前から広い範囲で使われていた」とする説もあったが、多くが否定されているか、あるいは確かな証拠が示されていない。」  
 「前期旧石器時代のホモ・エレクトスが火を使っていたかどうかについては異論を唱える学者もいる。しかし、中期旧石器時代のネアンデルタール人(ホモ・ネアンデルターレンシス)が火を使っていたことに関しては異論が少ない。ネアンデルタール人による火の使用の跡はいくつも見つかった。例えばフランスのドルドーニュ県XVI洞窟からは、乾燥した地衣類を燃料に使った6万年前の炉の跡が見つかった。また、ブリュニケル洞窟(フランス語版)からは少なくとも4万7600年前の炉の跡が見つかった。」(Wikipedia)

洞窟壁画:3万年前

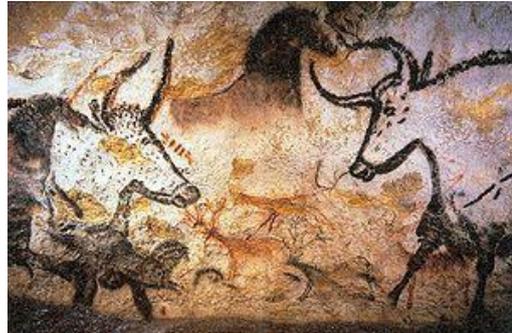
旧石器時代のクロマニヨン人が描いたとされる。

最も古いものは、ショーヴェ洞窟の絵で、3万2千年前のもの。ラスコーの壁画1万5千年前。一般的な題材は、バイソン、馬、オーロックス、鹿などの大型の野生動物、ヒトの手形。

ショーヴェ洞窟の壁画



ラスコーの壁画



定住生活:

人類が定住を始めるのは、一万年前だとされる。そこで木を切る必要から磨製石器がつかわれるようになる。これが新石器時代の始まりである。定住の後、農耕が始まったとされる。

文字の起源:紀元前6000年

ヴィンチャ文字:「古ヨーロッパ文字 (別名 ヴィンチャ文字または ヴィンチャ=トゥルダシュ文字) とは、[南東ヨーロッパ](#)で見つかる先史時代の遺物に書かれている印に与えられることのある名前である。この印は紀元前6000年-4000年に人が住んでいた[ヴィンチャ文化](#)の[文字体系](#)であると信じる者もいる。別の者は、問題の[銘文](#)は単純すぎる上記号の繰り返しが不足しているとして、印が何らかの文字を少しでも表しているということに疑いを持っている。」(Wikipedia)



ヴィンチャで発掘された粘土の[容器](#)、深さ8.5メートルで発見

2、洞窟壁画を描くものは、言葉を持っていたのだろうか？

チンパンジーは絵を描かない。絵をかく動物(象など)の話は、人間には絵を描いているように思えるということであるとされている。絵を描くには、志向性が必要である。ある図形が、「ある対象についての表象」であるという理解が必要である。言語もまた、志向性を必要とする。「馬」という語は、「ある対象についての語」である。

3、心理学、比較行動学の研究

鏡をみて自分が写っていることが分かるかどうかのマーク・テストに、ヒト亜属に属する類人猿(チンパンジー)はパスする、と言われている。したがって、アウトロピテクスもまた、マーク・テストにパスしたであろう。つまり、自己覚知 (self-awareness)をもっていたらろう。

では、相互覚知については、どうだろうか。つまり、個体xとyが向かい合っていた時に、

- ①xはyがいることを知っている。
- ②yはxがいることを知っている。
- ③xは、②を知っている。
- ④yは、①を知っている。

③は、たとえばyがxがいることを知らないかのように振る舞った時に、驚くということが実験で確かめられたらよいのである。

類人猿は相互覚知をもつのだろうか。

類人猿は、対象を提示する。

類人猿は、指さしを理解する。

しかし、類人猿は、自ら指さしをしないのではないか(?)。

マカクは、鏡の自己像を見ても、自分だとわからず他の個体だとみなす。しかし、類人猿は、マークテストをパスする。

## ■ミラーニューロン

「ミラーニューロン(Mirror neuron)は霊長類などの高等動物の脳内で、自ら行動するとき、他の個体が行動している状態の、両方で活動電位を発生させる神経細胞である。他の個体の行動を見て、まるで自身が同じ行動をとっているかのように“鏡”のような反応をすることから名付けられた。他人がしている事を見て、我が事のように感じる共感(エンパシー)能力を司っていると考えられている。このようなニューロンは、マカクザルで直接観察され、ヒトやいくつかの鳥類においてその存在が信じられている。」(Wikipedia)

## 4、仮説：言語の起源

### (1) 共同注意 (9か月革命 (トマセロ))

共同注意とは、

①母と子が同一の対象を見るだけではない。

②母と子が同一の対象を見ていることに気付いている。

②が成立するには、互いに相手の視線を確認する必要がある。共同注意において、幼児は

幼児が見ている対象=母親が見ている対象

を意識している。

(この時期の幼児は、心の理論をもたないので、「母親が見ているものを見ている」とは思っていない。)

(ある対象に注意すること自体が、実は共同注意によって可能になる。共同注意をとおして、何かの対象に注意することを学習する。したがって、幼児が何かを見ることが成立し、しかる後に、共同注意が成立するのではない。共同注意の中から、何かの対象に注意することを学習し、次に大人が対象に注意していることにも気づくようになり、二人で同一に対象に注意していることに気付くようになるのではないか。)

### (2) 一語文

ある対象を指示して「デンキ」というとき、

指さし対象=「デンキ」の指示対象

という同一性が成立している。一語文は、すでに同一性文として分析できる。ただし、幼児がそのような考えているわけではない。このような一語文は、問いへの答えとして分析できる。「デンキはどれですか」「あれです」「あれは何ですか」「あれはデンキです」しかし、実際の会話は、「デンキ?」「デンキ」のようになるだろう。